

年期に、回春の情と共に蕪村を襲った懐旧と郷愁の心が、若き日の現体験としての「浅川わたる」句作りを意識させたとみる事が出

来るようである。

(本学助教)

解釈と鑑賞

狭衣物語解釈 (7)

本 田 義 彦

源氏の宮の御かたちかくすぐれ給へる御名高くて、春宮のいとゆかしう思ひ聞えさせ給へるに、「さこそはつひの事ならめ」と思したり。うちの上も、昔の御遺言思し忘れず、あはれに聞え交はさせ給ひながら、おぼつかなくて過ぐさせ給ふもくちをしきを、「さやうにてうち住みもさせ給へかし」と、大臣にも聞えおどろかささせ給ひけり。されどいとどしき御有様を、「猶今少し盛りにねび整ひてこそ」など、おぼろげならず思し掟つる御有様なるべし。

〔口訳〕

源氏の宮の御容貌がこのようにすぐれていらっしやるという御

評判が高くて、皇太子がたいそう心ひかれ申しいらっしやるので、「結局は皇太子妃ということに落着くだろう」と、堀川大臣は思っておられた。帝も、昔の故先帝の御遺言を思い忘れず、源氏の宮と親しく音信を交してはおられたが、気がかりな状態で離れくにお暮しなさるのも残念なので、「皇太子妃ということに宮中で暮すようにおさせ申して下さいよ」と、堀川大臣にも注意申しなさるのであった。しかし、今までよりも一段と美しさのましてゆかれる源氏の宮の御様子を見ては、「やはりもう少し娘盛りに御成長なさってから、」など、堀川大臣は源氏の宮の結婚に対しては、ほんやりとではなくきっぱりと思ひ定めていらっしやる御様子であるようである。

〔注記〕

○源氏の宮——故先帝の晩年に中納言の娘の御息所との間に生れ

た女宮で、三歳の頃両親をなくしたので、父の妹の齋宮の上（堀川大臣の妻で、堀川の上ともいう）に引き取られて、齋宮の上の息子狭衣と兄妹のように育てられた女性。狭衣が心ひそかに恋するようになり、その思いが到底達せられそうにもないので、狭衣の物思いの種となる。この頃十四、五歳。狭衣は十八歳ばかり。

○春宮——一条院と一条院后宮との間に生まれた方。一条院は、堀川大臣の兄。

○思したり——この語の主語を、全訳王朝文学叢書（吉沢義則著）や日本文学全集（中村真一郎訳）では「狭衣中将」としているが、日本古典全集（松村博司・石川徹校註）に従って「堀川大臣」ととった。もっとも同書では、「堀川の上」もしくは「堀川夫妻」、または「狭衣」とも解することができるといっている。「日本古典文学大系」が底本とした「内閣文庫所蔵本」では「誰も思したり」となっている、この方が分りよい。

○うちの上——当帝のこと、堀川大臣の弟。

○昔の御遺言——全訳王朝文学叢書や日本文学全集では「御遺言のままに堀川大臣と親しくしていた」とあるので恐らく先に「故院の御遺言のままに、うち代り、帝ただこの御心に世を任せ聞えさせ給ひて、」（国文研究第十四号・五七頁）とあった「故院の御遺言」と解しているのであろう。「故院は、一条院・堀川大臣・当帝の父である。日本古典全書では「故院（又は故先帝）の御遺言」とあるが、「故院」であれば前述のごとく堀川大臣たちの父であり、「故先帝」であれば源氏の宮の父、堀川の上の兄ということになる。日本古典文学大系では、

本文の多少の異同はあるが「故先帝」と解している。「故院」とするか「故先帝」とするかによって、次の「あはれに聞え交はさせ給ひながら」の解も相違してくる。「故院」とすれば堀川大臣と「あはれに聞え交はす」のであり、「故先帝」とすれば源氏の宮と「聞え交はす」ことになる。兄の堀川大臣と父の遺言によって「あはれに聞え交はす」というのもオーバー過ぎるようなので、源氏の宮の父である「故先帝」の御遺言ととった。故先帝の御遺言については書かれてはいないが、源氏の宮の三歳の頃なくなられたのであるから、幼い娘の将来を案じて、当帝を始め、妹の堀川の上らに依頼されたのであろう。

○いとどしき御有様——古本には「いとほしき」とある由であるが、そうすると、まだ御幼少で結婚には早過ぎて可哀そうである意となって、この方が分りよい。

かくいふ程に、卯月も過ぎて五月四日にもなりにけり。夕つ方、中将の君うちよりまで給ふ道すがら見給へば、菖蒲引かぬ賤の男無く、往き違ひもて扱ふ様ども、「げにいかばかり深かりける十市の里のこのこひぢならむ」と見ゆる足もとどもの、いみじげなるも知らず顔にいと多く持ちたるも、「いかに苦しからむ」と目とまり給ひて、

うき沈み根のみ流るるあやめ草かかるこひぢと人も知らぬに

とぞ言はれ給ふ。玉の台の軒端にかけて見給へばをかしのみにこそ思さるるを、御車の先に、顔なども見えぬまであち群れて行き遣らぬを、おどろおどろしき御随身の声声にとどめられて、身の成らむやうも知らずかがまりるを見給ひて、「さばかり苦しげなるものを、かく言ふ」と制せさせ給へば「慣らひにて候へば、さばかりのものは、なじかは苦しと思ひ候はむ」と申すを、こひちをば我が御身に慣らひ給へれば、「心憂くも言ふかな」と聞き給ふ。

〔口訳〕

こうしているうちに、四月も過ぎて五月四日にもなつてしまつた。夕方、狭衣の中將が、宮中から退出される途中で御覽になると、菖蒲を引きぬいて持っていない身分の低い男はなく、大路を歩き違つてかついで行く有様は、「ほんとにどれほど深かった十市の里のその名の如く遠い山里の沼の泥であることだろう」と想像される足もなどが、ひどく汚れているのも知らず顔に平気な様子で、たいそう沢山持っているのも、「どんなに苦しいことだろう」と目にとまりなきて、

泥沼に浮いたり沈んだりして根ばかり見せて流れている菖蒲草、その菖蒲草が根をおろしている沼の泥がこんなにひどいとは誰も知らないように、私も源氏の宮を恋慕つては、その恋の苦しみに悩み沈んで道理もわからず、声に出して泣かれるばかりである。こんなに苦しい恋路とは誰も知らないのに。

と、こんな歌も自然口をついて出てしまふのである。立派な御殿の軒端にかけてご覧になるのであれば、趣深いといばかりお思ひにもなろうが、御車の先に顔なども見えないほどち群れて行きなやんでいのに、大げさな御随身の制止の声々にとどめられて、泥まれになるのもかまわずくまっているのを御覽になつて、「あんなに苦しうにしているのに、こんなにやかましく言う」と制止なされると、「慣れつこになつてしまつていますから、あれくらの荷は、どうして苦しいと思ひましよう」と申すのを聞かれて、こひち(泥)ではないがこひち(恋路)にはご経験があつてその苦しみもお分りなので、「情ないことを言うものだなあ」とお聞きになる。

〔注記〕

○十市の里——引歌がありそうであるが不明。十市の里は、和名抄に「大和国山辺郡十市里、止保知」とあり、大日本地名辞書には、磯城郡の条に「耳成村大字十市に十市森あり」とあつて、今の奈良眞櫃原市十市町であろうと考えられる。枕草子の「里は」の段にもその名が見える。(ただし、能因本・前田本には見えないが、三巻本にはない)。万葉集の「植安の池の堤の隠り沼の行くへを知らに舍人はまどふ(二二二)」の歌にある植安の池は、香具山の西北麓から耳成山にかけてあつたと言われる池で今はないが、この十市の里の地であつたろうと考えられる。「隠り沼」とあるくらいだから、菖蒲などの生い茂るには適した場所であつたのであろう。もつとも、十市の里は歌語としては「逢ふ事の遠き」にかけていうことが多く、こども「十市」を「遠地」にかけて、ただ遠

いというたためのもので、十市の里から取ってきたというのではあるまい。この物語の巻四にもかかるとをちの里も尋ねさせ給ひぬべかりけりと、見置き待りぬるこそ少し頼もしく」とあり、遠い所の意味に用いている。その他、十市の里の用例若干をあげておく。

夫木集・清輔集

あふことの十市の里は大和川おもはぬ中にありとこそ聞け拾遺集

くればとく行きてかたらむあふことの十市の里のすみうかりしも

○こひぢ——粉泥こひぢの意かとも、濃泥こまたは小泥の意かともいう。

「恋路」の意をかける、土。どろ。

○うき沈み根のみ流るるあやめ草かかこひぢと人も知らぬに——「浮き沈み」には「憂きに沈む」を、「根のみ流るる」には「音のみ泣かるる」を、「あやめ草」には「文目（筋道・道理）」をかける。

なお、この歌の解釈については諸註若干ずつ相違があるので、参考のために次に引用しておく。

全訳王朝文学叢書（吉沢義則著）

とやかくと恋のなやみに声たてゝ泣いてゐる自分である。

源氏宮はそれとも気附いて居られないのが淋しい。

日本文学全集（中村真一郎訳）

泥は沈んで根だけが流れている菖蒲なので、こんな泥こいじにまみれているものだと人は知らないだろう。

日本古典全書（松村・石川校註）

泥沼に浮きつ沈みつ根を絶えて流れる菖蒲。——言ひ出せない恋の苦しみに悩み沈んで忍び泣きに泣くよりほかに手段もなく虚しく月日は過ぎる。こんなに苦しい恋路にはまり込んで、ひとり悩んでゐるとは、誰も知らないで。

日本古典文学大系（三谷・関根）

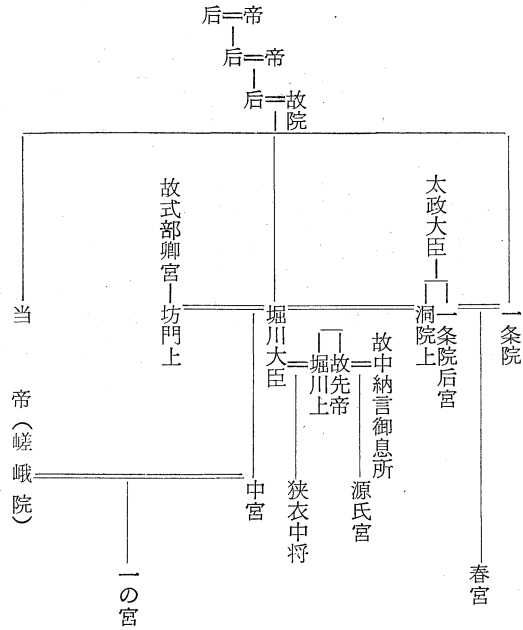
菖蒲が浮いたり沈んだりして根ばかり見せて流れている。私の源氏宮への恋はちょうどこの菖蒲のようなもので、憂きみ悩に心沈んで、道理もわからず、ただ声に出して泣くばかりだ。菖蒲が根をおろしている沼の中のどろを、人も知らないように、ただ自分一人、心の中でのみこっそり泣いている恋の道である。

○とぞ言はれ給ふ——「れ」は自発の助動詞。「こひぢ」は「泥」と「恋路」とをかけた表現で、「泥」こひぢまみれの賤の男を見て、我が身の「恋路」のことが自然思ひ出されたというのである。

○身の成らむやうも知らず——ここはうすくまるために泥まみれになるのもかまわないの意であろう。

（本学教授）

〔登場人物系図〕



昭和四十五年度国文学科卒業論文題目

氏名 論文題目

- 青木由紀子 辨内侍日記について
- 秋田 節子 「東海道中膝栗毛」に於ける笑いについて
- 飯塚真知子 木下左太郎処女戯曲「南蛮寺門前」についての作品考察

考察

池田 啓子 大祓に関する研究
石川喜美子 万葉集における漢土思想——儒教・老荘・神仙思想——

井手佳崇子 戯曲「風浪」における熊本弁研究

岩橋 佳子 紫式部考

岩本 篤子 児童文学作家新美南吉考

梅崎三知代 伊万里方言の助詞の研究

雲野加代子 「仮名手本忠臣蔵」の成立について

江口みさ子 「西行の出家説」について

江崎 怜子 「見徳一炊夢」について

緒方美知子 コノハナサクヤビメに関する考察——ニギノミコトとの婚姻を中心に——

加藤 貴子 源氏物語における「まめ」を語幹に持つ語について

金沢 貴代 平安朝における「にほふ」について

川上ちづ子 「室生犀星と堀辰雄における王朝もの」——「かげろふ日記遺文(犀星)」「かげろふ日記(堀)」を中心

喜多 正子

現代敬語の混乱についての一考察

木村 勝子 椎名麟三の軼機——「永遠なる序章」について——

黒瀬 幸子 高見順論「私生児」「転向・コキユ」を中心にして

源代 年恵 源氏物語における死の文芸性——紫上を中心に——

坂本 純子 梶井基次郎論「闇」と「光」を中心として

佐々木道子 平家物語における義仲の人間像

志水 安代 近松門左衛門作「大経師昔暦」について